

ひきこもり支援における就労へのプロセスに関する研究

—サポステを利用する若者への質的調査による検討—

小池 美嘉

1. 問題

ひきこもりの状態にある若者は、2010年時点で69.6万人にもものぼることが明らかとなっている(内閣府,2010)。彼らの多くは対人関係による傷つきを経験し、否定的なパーソナリティを形成している(秋山,2007;梅林,2011)。ひきこもり支援では、社会参加(就労)を押し進めるのではなく、心理特性にアプローチした支援が重要である(御旅屋,2010)。

ひきこもり支援の一つとして、居場所支援が行われている。対人関係から安心感や本来感を得られる居場所は、ひきこもりを経験した若者にとって重要である(西中,2014)。活動形態は、①受容される体験を通して自己肯定感を育む「サロンの活動」、②レクリエーションから深化したコミュニケーションを図る「余暇的活動」、③SSTや軽作業などの就労を意識した「就労準備的活動」の、3形態に分類される(柴田ら,2011)。しかし、支援の現状を踏まえると、社会参加につながらずに滞留する者の問題や(村澤ら,2012)、就労を意識して自己肯定感を下げてしまう者の存在(御旅屋,2010)が課題となっていた。また、居場所から就労へのつながりにくさには利用する若者の複雑な心理面が関連しており、花嶋(2013)は以下の循環を挙げている。①居場所の心地良さや必要性を再認識する、②就労継続を断念して疲れや傷つきの癒しを求める、③未解決の課題や過去の失敗経験などの払拭できない不安、④居場所への愛着や未練、である。

2. 目的

本研究では仮説として居場所を軸とした支援モデルを立てた。活動形態をサロンの活動→余暇的活動→就労準備的活動と移行させる。

また、Lv.1から段階的に設定し、螺旋状に展開していく。例えばLv.1のサロンの活動→余暇的活動→就労準備的活動を1段階として、次はLv.2のサロンの活動→余暇的活動→就労準備的活動にステップアップする。循環という二次元的モデルととらえるとするならば、余暇活動→サロンの活動の循環は、本人に“逆戻り”または“後退”とのネガティブな印象を持たせることになる。このような経験は自尊心の低い彼らにとって失敗経験となり、先に挙げた滞留という問題へとつながっていくと考えられる。しかしこれを三次元の立体的モデルとして捉え仮説を立てるとすると、たとえ先と同じような余暇活動→サロンの活動という循環があったとしても、LV.1からLV.2へと進んでいることを意味する。本研究では、仮説モデルの検証を行うことを目的とした。

3. 方法

本研究では栃木若者サポートステーション(以下、サポステ)の利用歴がある若者を対象にインタビューと質問紙調査を実施した。インタビューでは、サポステの登録をきっかけに、登録前と登録後について聞き取りを行った。前後で比較し、有効な支援の内容等を検討することを目的としている。インタビューの内容は計量テキスト分析より、「階層的クラスタ分析」と「共起ネットワーク」を行った。また、質問紙は坂柳(1996)の職業や人生への取り組み姿勢を測定する「キャリア・レディネス尺度(CRS)」を実施し、単純集計して個人の程度を測定することを目的とした。

4. 結果

結果では、居場所利用歴が浅く就労に至っていない対象者は、居場所について習慣とし

ての意味づけをしていることが明らかとなった。しかし内的変容としてポジティブさが認められ、居場所では新たな友人もできていた。CRSは非常に低かった。居場所とソーシャルスキルトレーニング (SST) の利用歴がある対象者は、過去から現在に共通して、人的資源から安心感を得ることが変化につながっていることが明らかとなった。サポステ登録後の現在では、友人や支援者が資源として位置づけられていた。CRSは平均的であった。就労に対し不安を感じている対象者は、サポステ登録前から大切なものとして位置づけられている趣味が、サポステ登録後には居場所と関連のあるものになっていた。CRSは、非常に高い得点であった。居場所を卒業し、就労に至っている対象者は、サポステ登録前はネガティブに感じていた現実に対し、サポステ登録後には支援者を通じて楽しいものとして捉えられるよう変容していた。また、居場所を要らないものする一方で、仕事に対し前向きな感情を抱いていた。仕事と支援者には関連がみられた。CRSは高得点であった。

5. 考察

本研究の結果から、居場所は定期的に通うことから始め、習慣となることで徐々に変容するのではないかと考える。これはサロンの活動のLv.1に位置づけられるだろう。居場所が内的に意味づけられることにより、ポジティブな感情が得られる場となる。そこで、SSTや就職活動を行えば、ネガティブさを抱いても居場所や友人、支援者といった資源があることで常に前に進んでいけるのではないだろうか。CRSが高得点でも就労に対し不安を感じている場合がある。この対象者は将来の目標に「声優」を掲げているが、それは趣味に分類される。居場所が趣味の場として充実することは良い反面、就労を現実的に捉えることを鈍らせてしまうのではないだろうか。この場合、余暇的活動から就労準備的活動に移行することが良いのではないかと考える。最終的には居場所よりも就労にポジティブな感

情を抱くことで、社会参加へと向かっていける。そのためにも仕事に至るまで支援者の存在は欠かせないだろう。

6. 今後の課題

活動形態を段階的かつ螺旋状に移行させる支援モデルは、新たな居場所支援としての可能性を秘めているのではないだろうか。今後の課題として支援モデルの具体化を検討し、実際の支援に活かせることを本研究の展望とする。

引用文献

- 秋山博介 (2007) 不登校についての一考察その2—学校教育とひきこもり、フリーター、ニートとの関係— 実践女子大学生生活科学部紀要 44, 1-14.
- 梅林秀行 (2011) 内的葛藤としてのひきこもり臨床心理学 11(3), 347-379.
- 御旅屋達 (2010) 若者自立支援政策における「居場所」事業の可能性 日本教育社会学会大会発表要旨集録 62, 8-9.
- 坂柳恒夫 (1996) 大学生のキャリア成熟に関する研究—キャリア・レディネス尺度 (CRS) の信頼性と妥当性の検討— 愛知教育大学教科教育センター研究報告 20, 9-18.
- 柴田秀幸・内海淳・若狭智子・澤井ちはや・牧野真悟 (2011) 青年期・成人期における発達障害者の「居場所」支援に関する検討 秋田大学教育文化学部研究紀要 66, 19-24.
- 内閣府 (2010) 子ども・若者白書(平成22年版) http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h22honpenpdf/pdf/b1_sho2_4.pdf(2016/01/25)
- 西中華子 (2014) 居場所づくりの現状と課題 神戸大学発達・臨床心理学研究 13, 7-20.
- 花嶋裕久 (2013) ひきこもりの若者が就労して居場所を離れるプロセス 心理臨床学研究 31(4), 529-540.
- 村澤和多里・山尾貴則・村澤真保呂 (2012) ポストモラトリアム時代の若者たち—社会的排除を超えて 世界思想社